

汉译日 翻译语法学

吴大纲 编著



华东理工大学出版社



日汉对比语言学研究之理论基础

1365.1
78

汉译日 翻译语法学

编著



华东理工大学出版社

上海



图书在版编目(CIP)数据

汉译日翻译语法学/吴大纲编著. —上海: 华东理工大学出版社, 2014. 2

ISBN 978 - 7 - 5628 - 3773 - 2

I. ①汉... II. ①吴... III. ①日语-翻译-研究 IV. ①I365.9

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2013)第 301236 号

汉译日翻译语法学

编 著 吴大纲

责任编辑 王 佼

责任校对 陈孟昀

封面设计 戚克群

出版发行 / 华东理工大学出版社有限公司

地址: 上海市梅陇路 130 号, 200237

电话: (021)64250306(营销部)

(021)64252001(编辑室)

传真: (021)64252707

网址: press.ecust.edu.cn

印 刷 / 江苏句容市排印厂

开 本 / 890mm×1240mm 1/32

印 张 / 8.5

字 数 / 243 千字

版 次 / 2014 年 2 月第 1 版

印 次 / 2014 年 2 月第 1 次

书 号 / ISBN 978 - 7 - 5628 - 3773 - 2

定 价 / 35.00 元

联系我们: 电子邮箱 press@ecust.edu.cn

官方微博 e.weibo.com/ecustpress

淘 宝 网 <http://shop61951206.taobao.com>



前 言

把自己的研究成果与教学实践相结合,直接服务于教学第一线,特别是在本科教学上取得教学效果的最大化,应该是我们这些既承担繁重的教学任务又从事研究工作的大学教师追求的一个既定目标。我为我校本科四年级学生所开设的选修课《句法与篇章法》(以前曾叫《专题语法》)和《翻译实践与理论Ⅱ(汉译日)》已经有过五个年头。这是我追求这个既定目标的具体体现。目前《句法与篇章法》的教材已经编写完成,且已出版,但《翻译实践与理论Ⅱ(汉译日)》教材至今还未定稿,仍在使用的本曾用过五六年的油印教材后于09年出版的《汉译日翻译问题》。定不了稿的原因主要是我一直在探索汉译日课程教学的最佳模式应该是什么样。我首先想谈谈这方面的想法。

汉译日教学与日译汉教学截然不同。纵观全国各高校日语专业的相关教学状况,大致可以得出不尽如人意的结论,其关键因素是教材。有关汉日互译的书籍已经出版了很多,老的不说就说最近出版的,比如《日汉翻译教程》(上海外语教育出版社,2008,高宁编)、《汉日翻译技巧与实践》(上海外语教育出版社,2005,吴侃编)都算是比较好的教材,但细观其内容,具有自己体系的不多。翻译是一门学问,姑且不谈翻译学是否应该有自己的理论(这是《日汉翻译教程》主要讨论的内容),但翻译本身具有体系性是毋庸置疑的。这种体系首先是指通过两种语言体系的对比构建起来的一个可操作平台。撇开语言文字运用的功底和惯用表达的把握不谈,两种语言的语法体系是一个重点(《汉日翻译技巧与实践》的内容主要集中于此)。特别在汉译日的时候,如果对日语语法体系缺乏系统阐述往往会事倍功半。翻译应该持有为翻译而建构的翻译语法体系。这就是我的追求。

众所周知,翻译是需要功底的,需要对两种语言都有很好地把

握,这其实不是一年两年或者在大学学习期间就能完成的修炼。我们需要展示的是在最短的时间内取得最佳效果的一种学习路径。特别是汉译日要求的是一种综合能力,其中包括语法体系方面的知识。这门课上好了,对提高我们学生的日语综合能力,建设具有我院学科特色的日语专业具有举足轻重的作用,在这几年的教学实践已经证明了这一点。

汉译日的教材应该具有什么内容,在最短的时间内能取得最佳效果,这是我们首先需要论证的。前文提及,汉译日所需要的语言文字运用的功底以及把握惯用表达方面的能力,不是一年两年或者在大学学习期间里所能掌握的。可是在宏观上把握两种语言的语法体系却是可能的,说到底是在培养一种感觉,有没有这种感觉很不一样,特别在汉译日的时候,在这里我们举例说明。

比如,在我的教材里有这么一个句子需要翻译,“女人要生娃子,母马要下骡驹,又添人口又添财。”学生开始时只能逐字逐句地译。而当我们说这里面还有一些韵味没翻出来时,有学生做了这样的修改,令人啼笑皆非。「妻も馬も子を産む」,问他为什么要这样翻,他说因为日语中的「妻」「馬」都含有「マ」音。当我们把最棒的展示出来并加以说明以后,可以感觉到来自学生的强烈反响。这里「女が子を産む、雌馬が子馬を生む、人口も財産も増えるというわけだ。」中的「というわけだ。」是不可或缺的,而这恰恰是需要进一步加以重点说明的语法事项。

还有鲁迅的《故乡》里一开头的两段:

我冒了严寒,回到相隔二千余里,别了二十余年的故乡去。

时候既然是深冬;渐近故乡时,天气又阴晦了,冷风吹进船舱中,呜呜的响,从篷隙向外一望,苍黄的天底下,远近横着几个萧索的荒村,没有一些活气。我的心禁不住悲凉起来了。

(きびしい寒さのなかを、二千里のはてから、別れて二十年にもなる故郷へ、私は帰った。

もう真冬の候であつた。そのうえ故郷へ近づくにつ

れて、空模様はあやしくなり、冷い風がヒューヒュー音を立てて、船のなかまで吹きこんできた。苦のすき間から外をうかがうと、鉛色の空の下、わびしい村々が、いささかの活気もなく、あちこちに横たわっていた。おぼえず寂寥の感が胸にこみあげた。)

这中间多处出现的「は」「が」问题，也是我们在语法课上也许还不能说清楚的地方，是否可以通过这里的实例进一步来探索其本质区别。^①

再比如，我们把汉语中含有“应该”的句子找出二三十句来，并把最棒的译文展示以后问，为什么会有十余种不同的译词？而从这十余种不同的译词在日语里面都表示一定的情态语气中，我们可以感觉到也不能把汉语里的“应该”看成一个一般的词，它必定是个含多种语气的情态词，必须加以重点处理。就这样，我们在教学中必须涉及很多系统语法知识。这也就是我们必须解决的重点难点。^②

笔者指导的博士研究生专业是中日语言比较研究，语言对比研究的起点和基础是对翻译语料的分析归类。这也是我长期以来研究的一个重点。我在这里涉及到的汉日语语法体系的构建和阐述源由本人编写的大学本科系列教材《日语语法 句法与篇章法》(上海外语教育出版社 2007)和专著《现代日语动词意义的研究》(上海外语教育出版社 2000)。笔者长期以来为上海外国语大学日本文化经济学院日语语言文学专业四年级学生所开选修课《翻译理论与实践Ⅱ》而编写汉译日油印教材，已经试用过几个轮回。此次，作为学校学科建设项目，作了一次大幅度的修改，形成一部具有一定研究性的翻译课程教材，应该说条件已经具备，时机已经成熟。

考虑到本项目的研究成果的重点是在提高日语使用水平上，因

①笔者在《中日言語比較研究における理論探究》(《日本学研究》(上海外语教育出版社 2007)里对此作过详细分析，请参考。

②笔者在《中日言語比較研究における方法論的な研究——翻訳文法論の構築を話題に》(《漢日理論言語学論文集》)(学苑出版社 2009)论文里对此作过详细分析，请参考。

此使用日语撰写。本书由三大章组成。在第一章序论里,首先论述了有关对翻译水平的评估标准问题,因为如何评估翻译优劣历来是个老大难问题。尤其是在汉译日的时候,翻译工作者应该具备的素质是什么。其中特别对一些已出版发行的译作中出现的误译作了分析评判。第二章本论是本书最重要的部分,在这里试图构建翻译语法体系。汉语和日语这两种语言的共同点是什么?不同点又在哪儿?我们在这里作了分析和解答,并指出我们应该把不同点作为我们关注的重点,大胆摒弃传统语法中的不合理部分,重新审视中国国内日语教学语法体系,为我们的翻译工作服务。在具体操作上,分“词的搭配”和“句末形式”两大块来进行。第三章是实践篇,按照第二章里所叙的两大块问题进行实际操练。我们认为,只有书本知识,不经过实践很难掌握,尤其是翻译,大量的实际分析训练必不可少。

目次

第一章 序論

一、翻訳とはなにか	1
二、いい翻訳者になるためには	1
三、いい訳文にするには	3
四、直訳、意識と誤訳	7
1. 直訳と意識	8
2. 誤訳	10
五、翻訳の一般的技法	18
1. 加訳	18
2. 減訳	18
3. 反訳	19
4. 変訳	19
5. 倒訳	20
6. 分訳	20
7. 合訳	21
六、文法と語彙の分化	21

第二章 翻訳文法論の構築

七、翻訳のための文法論	24
1. 中日両語の文法上の根本的相違点	24
2. 単語と単語の組み合わせ	25
3. 動作メンバーなのか文メンバーなのか	29
4. 後置詞について	30
八、中日における連語の認定	37
1. 中国における連語研究の歴史と現状	39

2. 日本における連語の特徴	48
3. 日本語における連語構造の形	51
九、動詞の意味と連語的な構造	53
1. 動詞の基本的な意味と派生的な意味	54
練習問題一	
2. 連語の構造を広げることと構造に縛られること との違い	61
練習問題二	
3. 動詞の意味は名詞の性質と深く関わっている	71
練習問題三	
4. 動詞の意味の形象的な用法と主体の関係	77
練習問題四	
5. いわゆる自他動詞と原則論	81
練習問題五	
6. 動詞の意味と複雑な構造の内的関係	87
練習問題六	
7. 動詞の意味と慣用句	93
練習問題七	

第三章 翻訳文法論によるヴォイスの構築

十、日本語の主語と主題	98
1. 主語	98
2. 主題	100
3. とりたての「は」	100
十一、中国語の“配价理论”	102
1. 動作主が主語になる場合	103
2. 対象語が主題になる場合	103
3. 代名詞で飾られた主題	104
4. 無指定を表す主語	104
5. “介词”(後置詞)の一部が主題になる場合	105
練習問題八	

第四章 受身表現

十二、日本語の受身表現	107
1. 直接対象のうけみ	108
2. 間接対象のうけみ	108
3. もちぬしのうけみ	108
4. 第三者のうけみ(めいわくのうけみ)	108
十三、中国語の受身表現	110
1. 無標識の受身文	110
2. 「被」の使用が可能な受身文	110
3. 被字句(叫、让、给を含む)	111
練習問題九	

第五章 使役表現

十四、日本語の使役表現	113
1. 本来の使役	113
2. 許可・放任の使役	113
3. 他動詞相当の使役	114
4. 再帰構文	115
5. 中国語の使役表現	115
練習問題十	

第六章 授受表現

十五、日本語の授受表現	121
1. してやる(あげる・さしあげる)	122
2. してくれる(くださる)	123
3. してもらう(いただく)	123
4. やりもらいとヴォイス	124
5. 中国語の授受表現	124
練習問題十一	

第七章 可能表現

十六、日本語の可能表現	130
十七、中国語の可能表現	134
練習問題十二	

第八章 時間表現

十八、日本語の時間表現	143
1. アスペクト・テンスとはなにか	143
2. 日本語におけるアスペクトとその2語形：完成相と 継続相	143
3. 日本語におけるテンスとその2語形：非過去形と 過去形	146
十九、中国語の時間表現	150
1. 中国語におけるアスペクトとその語形：助詞として の「着」	150
2. 中国語におけるアスペクトとその語形：「了」.....	152
3. 中国語におけるテンス	155
練習問題十三	

第九章 いろいろな文末のモダリティー形式

二十、日本語の文末のモダリティー形式	163
1. 文の内容と述べ方	163
2. 文の述べ方	163
3. 「だろう」の意味と用法	167
二十一、中国語における文末述語のモダリティー形式	169
1. 中国語における述べ立てる文	169
2. 中国語におけるたずねる文	170
3. 中国語における働きかける文	172
練習問題十四	
二十二、日本語のおしはかる文	181

1. 日本語におけるおしはかる文で使われる「だろう」の 意味と用法	182
2. 中国語における「だろう」の認定	185
練習問題十五	
二十三、日本語におけるモダリティー	194
1. いろいろな述語の形式	194
2. 陳述副詞とモダリティー	211
二十四、「应该」について	213
1. 比較言語学とは	213
2. 「应该」の訳いろいろ	214
3. 「ほうがいい」に相当する訳	221
二十五、結語	225
参考文献	227
附录 翻译练习答案	230

第一章 序 論

一、翻訳とはなにか

翻訳とは、日文中訳の場合は、日本の人が、日本語で考え、言ったり書いたりしたことを中国人の私なら、中国語でどう考え、言ったり書いたりするだろうかという、比例式的に解く作業である。それに対して、中文日訳の場合は、中国の人が、中国語で考え、言ったり書いたりしたことを、外国語としての日本語でどう考え、言ったり書いたりするだろうかという、比例式的に解く作業である。特に中文日訳の場合は、翻訳者の仕事としては、この日本人にどんなふうに日本語をしゃべってもらおうか。表現してもらおうかではなく、日本人ならこれを何と言うだろうか、表現するだろうかを考えることだと思う。

翻訳に理論があるかどうかはさておき、翻訳者としての理念はあるはずである。なによりもまず、原作者がその読者に与えたのと同じ効果を、翻訳者はその読者に与えなければならない、ということだろう。

こうして考えてみれば、翻訳というのは大変な作業だと言わざるを得ない。

二、いい翻訳者になるためには

言うまでもなく、翻訳者はまず第一に、翻訳しようとする原文について相当な基礎力を持っていなければならない。母語だからといって、基礎力の向上にたゆまぬ努力を怠ってはならない。外

国語についての基礎力を有することを翻訳者の必要条件とすることには誰も異論はないだろう。しかし、自分の母語に磨きをかけ、レベルアップをはかることも極めて重要であるということは、往々にしておろそかにされがちである。母語の水準が低ければ、それで書かれた文章の内容や風格、持ち味を正確に深く把握することができないので、翻訳のキーポイントである原文の「把握」に問題が生じ、それが訳文のよしあしに大きくひびいてくるのである。

第二に、日本語及び日本に対して豊かな知識と生活体験を有することも、翻訳者にとって必要不可欠の条件である。日本語が少し分かれば、あとは辞書さえあれば翻訳ができると思っている人もいる。特に中国語と日本語のあいだの翻訳についてそういうような考え方をしている人が多い。中日両語ともに漢字を使っているのでお互いになんとか分かるというのであるが、これはとんでもない間違いである。翻訳の対象となる内容は森羅万象、あらゆる分野、すべてのジャンルにわたっている。この点はほかの科目や専攻とまったく異なっており、翻訳者は関係語学以外では、狭くて深い知識よりも広くて豊かな知識が求められる。もちろん、ある特定の科学・技術分野の翻訳だけに従事する場合は、その分野に関する科学・技術の知識がかなり深く要求される。その場合でも、科学・技術が専門化・細分化とともに学際化・総合化の傾向を強めている今日では、その知識にある程度の広がりが必要とされる。また、文学作品を翻訳する時には、その国の民族性や風習・生活様式も含めた豊かな知識と生活体験を必要とする。生活体験については、いちいちその国に行ってまで直接に体験することはできないが、自分の生活体験を豊かにしておけば、自ずから共鳴する部分生まれ、印象や感触によって間接的に生活体験をすることができる。

また、翻訳にはそれなりの技法やテクニックがあって、それらを把握し駆使しなければ、翻訳はできないし、ましてやいい翻訳はできない。翻訳の技法やテクニックは翻訳の実践のなかで知ら

ず知らずのうちに体得し、無意識のうちにそれを運用しているのである。その体得は人によって、とくにその人の翻訳実践の量と質によって、まちまちである。したがって、翻訳実践の量と質が物を言う場合が多い。もちろん先人の経験から学ぶことも大事である。

三、いい訳文にするには

言うまでもなく、翻訳の第一歩は原文を正しく完全に理解し把握することである。そのためには、原文についての基礎力が要求されるばかりでなく、種々さまざまな作業が必要になってくる。たとえば、ニュースや時事問題を翻訳する時には、取りあげられている問題や事件の歴史的な流れ当時の社会的背景、さらには使われていることばの適確な意味内容などをよく調べなければならない。また、ビジネス関係の書類や科学・技術関係の論文を翻訳する場合には、まず関連の状況や知識を頭に入れ、専門用語が分からなければ調べておく必要がある。文学上の名作・大作を翻訳する場合、原作のモチーフや内容を把握するばかりでなく、作者の属する国や民族の文化や歴史・風習、原作の時代的背景、作者の思想的傾向や文筆的特徴、作者と作品に対する社会的評価などを調べる必要がある。

こうした原文の正しく完全な理解と把握が訳文のよしあしに決定的な影響をあたえるのであるが、この段階で特に避けるべき点が二つある。一つは、「多分そうだろう」という当て推量やいい加減な態度である。もう一つは、全体の文脈を考えないで、一つの単語、一つの文節、一つのセンテンスの意味をバラバラにとらえることである。

翻訳の第二段階は、把握した原文をどのように訳文に表現するかという作業である。この段階では、もちろん訳文に使われる言語についての訳者のレベルと表現力が問われるのだが、そのほかに、翻訳に関係ある二つの言語の比較対照が極めて重要である。

いうまでもなく、第一の段階——原文の「把握」の段階においてすでに二つの言語の比較対照が行われているのであるが、そこでは意味の把握にポイントがおかれているため、それほど意識的に行われているわけではない。ところが、訳文への「表現」の段階になると、どうしても意識的に細かく二つの言語の比較対照を行わなければならない。単語一つをとってみてもそうである。原文の「把握」の段階で単語の意味を調べるために辞書を引く。一つの単語にいくつもの意味がある場合、原文の内容からまたは前後の関係から適当と思われる意味を一つだけ選ぶ。これで原文の「把握」はできるのだが、辞書から意味は分かるとしても、それが適訳だとは限らないので、訳文への「表現」の段階では、両言語の比較対照をして適訳を考え出さなければならない。また、翻訳は逐語訳ではないので、訳文への「表現」の必要から、一つの単語を二つ以上の単語で表現したり、逆に二つ以上の単語を一つのことばにまとめて表現する必要も生じてくる。これも二つの言語のきめ細かな比較対照を通じてはじめて可能になる。一つのセンテンスや文章のひとつくだりになると、さらに、二つの言語の文法・構文法・表現法のちがいから発想や習慣のちがいまで比較対照して訳文への「表現」を考えなければならない。

ここでは、まず、大まかに文法とは何かについて考えてみたい。

われわれは、いろいろな出来事や有様、また、気持ちや考えを言葉によって、人に伝える。言葉は、文と単語という二種類の基本的な単位によって区切られている。

現実の出来事や有様はひとまとまりのものであるが、人間の言語では、その現実からもの、運動、性質などの側面をひっぱりだして単語であらわし、その単語をくみあわせて文にしてあらわすのである。つまり、ひとつのまとまりである現実の出来事や有様を、分析と総合の過程を通してあらわすのである。

文と単語という二つの単位が分化しているおかげで、わたしたちはいろんな現実をあらわしわけることができる。つまり、文と

単語の分化によって、言語は有限の単語によって無限にちかいかまざまな現実をあらわしわけることができるのである。もし、このことがなかったら、さまざまな現実の出来事や有様の数だけ、記号が必要になるはずである。

文法体系を研究対象とする言語学の分野は文法論といわれるが、文法論はおおきく形態論と統語論にわかれる。形態論は単語の文法的な側面を扱う分野であり、統語論は文または単語の組み合わせの文法的な側面を扱う分野である。

単語を材料にして文をつくるとき、二種類の法則を使う。

A: 単語の形態に関する法則: ネコ→ネコ+ガ, ネズミ→ネズミ+ヲ, ウチ→ウチ+ノ, トル→トル+ルール+ッタ, キノウ→キノウ。

B: 文に関する法則: (語順)キノウ ウチノ ネコガ ネズミヲ トッタ。

(イントネーション)しりさがり。

それから、翻訳のための文法とは何かについて考えてみたい。

一般言語学的な立場に立った言葉の研究は、比較研究が欠かせないものである。理論言語学にしる、応用言語学にしる、個々の言語の特殊性を強調しすぎて、共通のフィールドに据えておかないと、理論言語学はもちろん、個々の言語学、つまり、日本語言語学や中国語言語学、さらに英語言語学やロシア言語学などといった具体的な言葉の研究も行き詰まりがちになってしまう。

日本語という言葉の研究の場合、日本における最近の研究成果を眺めると、まさに、そのような比較対照研究の重視というような傾向が一段と顕著になってきたと感じられる。つまり、日本語の研究がかなり国際的なレベルにアップされてきたとして注目されているのである。これには私たち日本語教育・日本語研究に携わっているものとして、無関心ではいられないものである。

また、日本語の文法体系の確立を土台にして、私たちの母国語である中国語を文法体系の視点から眺め、比較研究を通じて建設的に発信していくのも、私たちの担うべき責任ではないのだろ